

それをしないことには、社会民主主義者は……

わが国には、労働者が資本家または政府との個々の小戦闘で敗北するたびに、それに影響されて悲観主義に陥り、大衆にたいするわれわれの影響の程度が不十分であることを言いたてて、労働運動の最高の偉大な目標にかんするあらゆる会話を軽蔑したようにおしける社会民主主義者がすくなくない。われわれにそんなことができるものか！われわれにはそんな力はない！このような人々は、こう言っている。われわれが大衆の気分をはつきり知りさえしないのに、大衆と融けあって、労働者大衆を決起させることもできないのに、革命における前衛としての社会民主党の役割を論じてもしようがない！と。今年のメーデーにさいしての社会民主主義者の失敗は、このような気分をいちじるしくつよめた。いうまでもなく、メンシェヴィキ、すなわち新イスクラ派は、まるでだれかへのつらあてのように、まるで臨時革命政府、革命的民主主義的独裁、等々にかんする思想や会話への回答であるかのように、大衆へ！というスローガンをいま一度特別のスローガンとしてもちだすために、いそいでこの気分をとりあげた。

この悲観主義と、性急な新イスクラ派の政論家たちがそこから引きだしている結論とには、社会民主主義運動に由々しい害毒をもたらす恐れのある、一つの非常に危険な特徴があることを、みとめないわけにはいかない。いうまでもなく、あらゆる生き生きとした、生命力ある党にとっては、自己批判は無条件に必要である。自己満足的な楽観主義ほど卑俗なものはない。大衆にたいするわれわれの影響をふかめひろげ、ひろげふかめること、われわれが厳密にマルクス主義的な宣伝と煽動を行うこと、われわれが労働者階級の経済闘争に接近すること、等々が、たえず無条件に必要であるという指示ほど、至当なものはない。だが、このような指示は、どういう条件や状態のもとでもいつもかわらず至当であるからこそ、それらを特別のスローガンに転化してはならないのである。それらは、それらのうえに社会民主党内のなにか特別な流派を打ちたてようとする試みを、正当化するものではない。そこに限界がある。この限界を越えるなら、諸君はこれらの論争の余地のない指示を転じて、運動の任務と規模とをせばめるものにしてしまい、現時機の緊要なまっさきの政治的任務を空論主義的にわすれさせることにしてしまう。

活動と大衆にたいする影響とをふかめ、ひろめることは、つねに必要である。それをしないことには、社会民主主義者は社会民主主義者でない。もしたえず規則正しくこの活動を行わないとしたら、どんな組織、グループ、サークルも社会民主主義組織とみなすことはできない。われわれが厳密に自分を他から分離して、別個の独自のプロレタリアート党をつくるということの全意味は、かなりの程度まで、われわれができるだけ労働者階級全体を自覚した社会民主主義の水準にまでたかめ、どんな、まったくどんな政治的嵐によっても——まして舞台装置の政治的転換などによって——この緊要な活動から引きはなされず、いつも断固としてこのマルクス主義的活動を行うことに、あるのである。こういう活動がなければ、政治活動は不可避免的に退化して、遊戯となってしまう。というのは、この政治活動がプロレタリアートにとって重大な意義をもつのは、それが特定の階級の大衆を決起させ、この階級の関心と呼びおこし、この階級をうごかして諸事件に積極的に先頭に立って参加させるばあいだけであり、またそうする程度に応じてだけだからである。われ

われがすでに言ったように、このマルクス主義的活動はつねに必要である。敗北するたびに、そのあとではいつでもこの活動をおもいおこすことができるし、またそうしなければならず、それを強調すべきである。なぜなら、この活動の弱いことがつねにプロレタリアートの敗北の一原因となっているからである。また、勝利するたびに、そのあとでつねにこの活動をおもいおこして、その意義を強調すべきである。なぜなら、そうしなければ、勝利は外見上のものにとどまって、その成果は確保されず、われわれの終局目標のためのわれわれの偉大な闘争全体の見地からみるとときにはこの勝利の現実的意義はごくわずかなものとなり、また否定的なものにさえなりかねないからである（すなわち、部分的な勝利がわれわれの警戒心をねむらせ、あてにならない同盟者への不信をよわめ、敵にたいするその後のもっと真剣な攻撃の機会をのがさせるばあいには）。

だが、大衆にたいする影響をふかめ、ひろめるこの活動は、いつでも同じように、どの勝利のあとでも、どの敗北のあとでも、政治的停滞の時代にも、嵐のような革命の時期にも、必要であるからこそ——まさにそれだからこそ、この活動についての指示をなにか特別のスローガンに仕立てあげ、そのうえに特別の流派を打ちたてるなら、デマゴギーに陥り、先進的な、唯一の真に革命的な階級の任務をひくめる危険をおかすことにならざるをえないのである。社会民主党の政治活動にはつねにある程度の教育学の要素があるし、これからもあるだろう。すなわち、あらゆる圧制から全人類を解放するための闘士としての役割をはたすように、賃金労働者階級全体を教育しなければならない。この階級のますます新しい層をたえず訓練しなければならない。この階級の、もっとも無教育な、おくれた、われわれの科学をも生活の科学をも知ることのもっともすくない代表者たちに、近づく仕方を知らなければならない。それは、彼らと話しあうことができ、彼らと親しくなることができ、われわれの学説を無味乾燥な教条に変えることなく、また書物によってこの学説をおしえるだけでなく、これらのもっとも無教育な、もっともおくれたプロレタリアートの層の日常の生活の闘争に参加することによってこの学説をおしえ、堅忍をもって辛抱よく彼らを社会民主主義的意識にたかめることができるようになるためである。くりかえしていうが、この日常活動のなかにはある種の教育学の要素がある。この活動をわすれるような社会民主主義者は、社会民主主義者ではなくなるであろう。これはたしかである。だが、こんにちわれわれのところには、政治の任務を教育学に帰着させようとする社会民主主義者もやはり——べつな理由によってではあるが——社会民主主義者でなくなることを、わすれる人々が往々にしている。この「教育学」を特別のスローガンに仕立てあげ、それを「政治」に**対置させ**、この対置のうえに特別の流派をうちたて、このスローガンを名目として社会民主党の「政治家」に反対するよう大衆に訴えることをおもいつくような人々は、すぐさま、不可避免的にデマゴギーに転落するであろう。

比較というものは、どんなものでもかたよったものである。このことは、ずっとまえから知られている。あらゆる比較は、比較される対象もしくは概念のただ一つの面だけ、あるいはいくつかの面だけを比較し、他の面は一時的に条件づきで捨象する。この周知の、だがしばしばわすれられている真理にたいして読者の注意を促したうえで、社会民主党を、初等、中等、高等の教育を同時に行う大きな学校と比較してみよう。この大きな学校は、イロハの教授という仕事、知識の初歩と自主的思考の初歩とをさずける仕事をけっして、どんなことがあっても、わすれることはできないだろう。だが、もしだれかがイロハを口

実にして高等知識の諸問題をまぬがれようと考えつくなら、もしだれかがこの（イロハをまなぶ一群にくらべて、何分の一かの小さな群にしか理解できない）高等知識の、長もちのしない、疑わしい、「狭い」成果を、初等学校の、強固な、深い、広範な、堅実な成果に対置しようとするなら、そのような人はひどい短見を暴露することになるだろう。そのような人は、大きな学校の全体の意味をまったくゆがめるのをたすけることにさえなりかねない。というのは、高等知識の諸問題を無視することは、山師、デマゴグ、反動家がイロハだけしかまなばなかった人々をまよわすのを、容易にするだけだろうからである。あるいはまた、党を軍隊にたとえよう。平時でも戦時でも新兵の訓練を、射撃の稽古を、軍事知識のイロハを大衆のあいだにひろくふかく普及させることを、わすれてはならない。だが、もし演習または実戦の指揮官が……

第八卷 政治と教育学との混同について P454-457 一九〇五年六月に執筆
一九二六年に『レーニンスキー・ズボールニク』第五号にはじめて発表

コメント

1905年1月9日、血の日曜日を経験し、ロシアは大きく動き出し、レーニンは革命的情勢になりつつあることを認識し、それにそなえた方針、具体的な準備の必要性を訴えた。それに対し、ツアリーがみせかけの議会創設による革命の流産をこころみるなかで、メンシェヴィキは右翼勢力との協力の道を歩みはじめていた。その中で大衆との結びつきを口実にして、おくれた層に迎合し、革命に反対するメンシェヴィキの攻撃に対してレーニンが反撃したものである。

ここに書かれている初等教育も高等教育もしなかったメンシェヴィキは、その後、解党主義、合法主義への道を歩むことになった。